



それは全く想定外だった。

俺は夏葉にだけは手を出さないことにしていたが、  
思いもよらず夏葉の方から先に近づいてきたのだった。

初乗りの高価な外国車で浮かっていた

俺はなすがままだった。

「こんなに大きくしちやつて。  
しょうがないプロデューサーね♥」








その日から、夏葉は時間がある度に  
俺を求めるようになった。

問題があるとすれば、彼女はいつも自分が  
主導権を握ることに固執していたことだ。

フェラも、その大きな胸を活かしたプレイスリも、  
自分がじっとしているのが嫌だ、と正常位さえも  
拒否したのである。



多分、可愛がられて育った金持ちのお嬢さんにとって  
このような行為は一種のスリルと同時に  
征服感を味わえるお遊戯なんだろう。

俺はそんな自分に主導権が無いセックスに  
漠然とした不快感を感じているようだった。

少し叱ったほうが良いだろう。

なぜなら、そういうのは全然「ムラムラ」しないからだ。

「…プロデューサー、私の話聞いてる？」

「夏葉、ちよつといいか？」

「…？」

夏葉は俺の突然の言葉に戸惑ったが、  
すぐに顔を赤らめて俺と一緒に外に出た。



「何かしら？」

夏葉の目はすでにメスの肉食動物の目つきを  
していた。

怖いな…



俺はこれからの期待で膨らんだ夏葉に  
面と向かって言った。

「夏葉。プロデューサーと

担当アイドルとの間で、こんな関係は正しくない」



「…」

「…あなたは他のアイドルにも  
手を出しているのではないかしら？」

「…?!」



どうやら夏葉には俺の  
「こんな関係」がバレていたようだ。

「未成年者よりは私と」する」方が  
倫理的じゃないかしら？」

「もちろん私はあなたとだけ「する」から  
全然構わないわ」

俺はそんな彼女の余裕が気に食わなかったのだろう。



「もし、俺が理性を失って、避妊具をつけないとか  
あるいは暴力を振るったらどうするんだ？」

「プロデューサー！」

私は鍛えているし腕には自信があるのよ。

もしそんなことが起きてもあなた一人くらい大丈夫よ。」

興が醒めたのか、  
そう言って彼女は事務所を後にした。



数日後。。。

その夜は、次の放クラロケのため、  
旅館へ下見をしに来た日だった。

夏葉は放クラのみんななど行くところならど、  
前回のロケで買い取った浴衣を着て  
無理やり俺を付いて来た。

夕食後、予想通り夏葉は酒をちびちび飲んで酔った振りをして、それとなくパンツを脱ぎ始めた。

「暑くなってきたわね…」

決断が必要な時だった。



ねえプロデューサー

しましょ?♥

プロデューサーは  
動かなくてもいいわよ

私が全部してあげ...

きゃ?!

ハァ  
ハァ  
ハァ

キゅん  
キゅん

プロデューサー?!

こんな獣のような  
体位はだめよ!

せめてコンドームだけ...

これではまるでレ、レイプよ?!

プロデューサー、やめ...♥

この力は一体...  
全然動けない♥

嘘っ、  
いつもより大きい...♥

翌朝、帰る車の中は沈黙だけが流れた。

夏葉にそつと声をかけてみたが会話は続かず、短い答えだけが返ってきた。

昨日はいつもより何回もイカせてしまったけどやはり怒っているようだ。

夏葉の目頃のエネルギーギツシユな姿はどこかへ行き、少し上気した表情で通りかかる風景だけを見続けていた。

俺たちは到着するや否や、誰が先とも言わずに逃げるようにして別れた。

家へ帰った俺はふと心配に襲われた。

この状況、有栖川家に知られたらどんなことが起こるのか。

昨日は、勢いよく夏葉を押し倒し、ほとんど強引にチンコを押し込んだが、後のことを考えていなかった。

他のアイドルたちとする時とは違い、夏葉には「有栖川家」というとてつもないリスクがあった。

もし、ひょっとしたら、昨日のことが、悪い方向で伝わりでもしたら、俺、いや俺だけでなく、事務所にも大迷惑になるかも知れない。

そうになったら夏葉はもちろんアイドルのみんなに合わせる顔がない。

欲望と両立してギリギリで築いてきた俺のキャリアをこんなところまで…。



## 翌日

事務所はいつもの日常だった。

ちょうど放クラのレッスンがあった目で

果穂と凜世、そして夏葉が樹里と智代子を待っていた。

いつもと違うものがあるとしたら、夏葉だった。

果穂と凜世と話をしている時も、  
時々机に座っている俺をチラッと見てくる。

アイドルを辞めるなんて言い出したらどうしようか。  
いや夏葉がそんなことを言うわけないとは思うが…。

針の座布団で座っているようだった。

「プロデューサー？ちよっといいかしら」

その時、先に話しかけてきたのは夏葉だった。

俺たちはできるだけ静かに目立たないように事務所の外に出た。



「昨日は俺がやりすぎたよ。」

夏葉はじろじろと俺の目を眺めている。

やはりこんな状況は性に合わない。

「一回だけ見逃してあげる。」

「…」

「でも、次回は…。」



「いや。」

「え？」

「夏葉、やっぱり考え直したけどアイドルとプロデューサーの関係にこういうのは良くないと思う。」



「…？プロデューサー、どっつらうことかしら？」

「じゃあアイドルをプロデューサーが強姦するのはいいの？」

「いや、それはすまないって。」

「そしてこの前にも話したようだけど、他の子達も手を出すのはいいの？どっつして私にだけそうするの…？」



元々はただ夏葉とのセックスがまるで  
闇獅子に襲われるような気持ちだったので  
嫌っていただけだったが、  
今ではもっと現実的な理由がある。

夏葉とのセックスを続けてたら、有栖川家と何の  
トラブルが起こるか分からない。

事があまり大きくなってしまいう前に関係を断とう。

それが週末の間に下した俺の結論だった。

「もしかして、私が嫌いなもの？」

「…?!」

「もしかして、初めて会った時の言葉を心に留めているの？」

夏葉は泣きそうな表情で俺に問い返していた。



こんな反応が出るとは思わなかった。これは良くない…  
何とかしないと…。

「もしかして他の子たちは私がしてくれないことをするの？」

「…うん？」

その時、ふと俺の頭の中にある考えが浮かんだ。

「あるにはある…。」

「それは何かしら？」

「フェラとかかな…。」

「フェ…？」

「オーラルセックスだよ」

夏葉はフェラチオを不衛生だと言って断っていた。しかし、フェラは奉仕されるような感じがするし、普段のセックスよりはましかも知れない。

それに何よりも、挿入しないなら有栖川家に  
関係がばれた時もしか抜け道があるかもしれない。



「それをしてほしいの？」

「うん」

「いいわよ」

「E:」

「その代わりプロデューサーはじっとしてなさい。  
私が動くから。」

「えっ、まさか今から？」





「夏葉！樹里たちが帰ってきたら俺たちを探すって。今すぐしなくてもいいだろ。」

「いや、話が出たならすぐにしないと。」

言葉ではそう言っていたが、夏葉の顔にはいつとでも違って緊張感がありあった。

ぽろぽろ

歌とダンスはいくらでも努力できるが、セックスは練習できないからだろうか。

考えてみると普段のセックスも少しぎこちない感でしていた。

夏葉はネットかなにかで見ただことでもあるのか、  
亀頭を熱心に舐め始めた。

しかし流石にこの状況はまずい。

ここは事務所の外の階段だ。

事務所から話し声が聞こえてくるほど近いこの場所で、  
誰かが来たりしたら大変だ。



「あ…」

はらはらするような状況のおかげか、夏葉が舐めた  
おかげか、俺のチンコはあの夜くらいに大きくなっていた。  
場所を移そうと言っても聞き入れそうにないだろうし、  
俺が動いて早く射精するのが上策だろう。

俺は夏葉の頭を軽く手でつかんだ。

むわな

「私が自分でするわ！」

「お、おう…」

夏葉の怒鳴り声に、俺はきまり悪く腕を下ろすしかなかった。

カッ





夏葉は口の中にある唾を力いっぱいためて、

やっと亀頭の前部を埋めることには成功したが、

生まれて初めて嗅ぐ臭いに衝撃を受けたような顔をした。



「もう少し、根本まで飲み込んでくれ。」

俺は丁寧に優しく夏葉にねだった。

正直焦りもあったが、一昨日の夜のことも  
あったので夏葉に詰め寄ることができない。



「んぶ…」

夏葉は吐き気を催しながらもゆっくり  
俺のチンコを飲み込んでいく。

その唇の下にはチンコでよどんだ唾液が  
下品にずり下がっていた。

罪悪感もあったが同時に、いやそのために  
かなりいやらしい光景である。

しかし正直言つと物足りなげ。

クマクマ

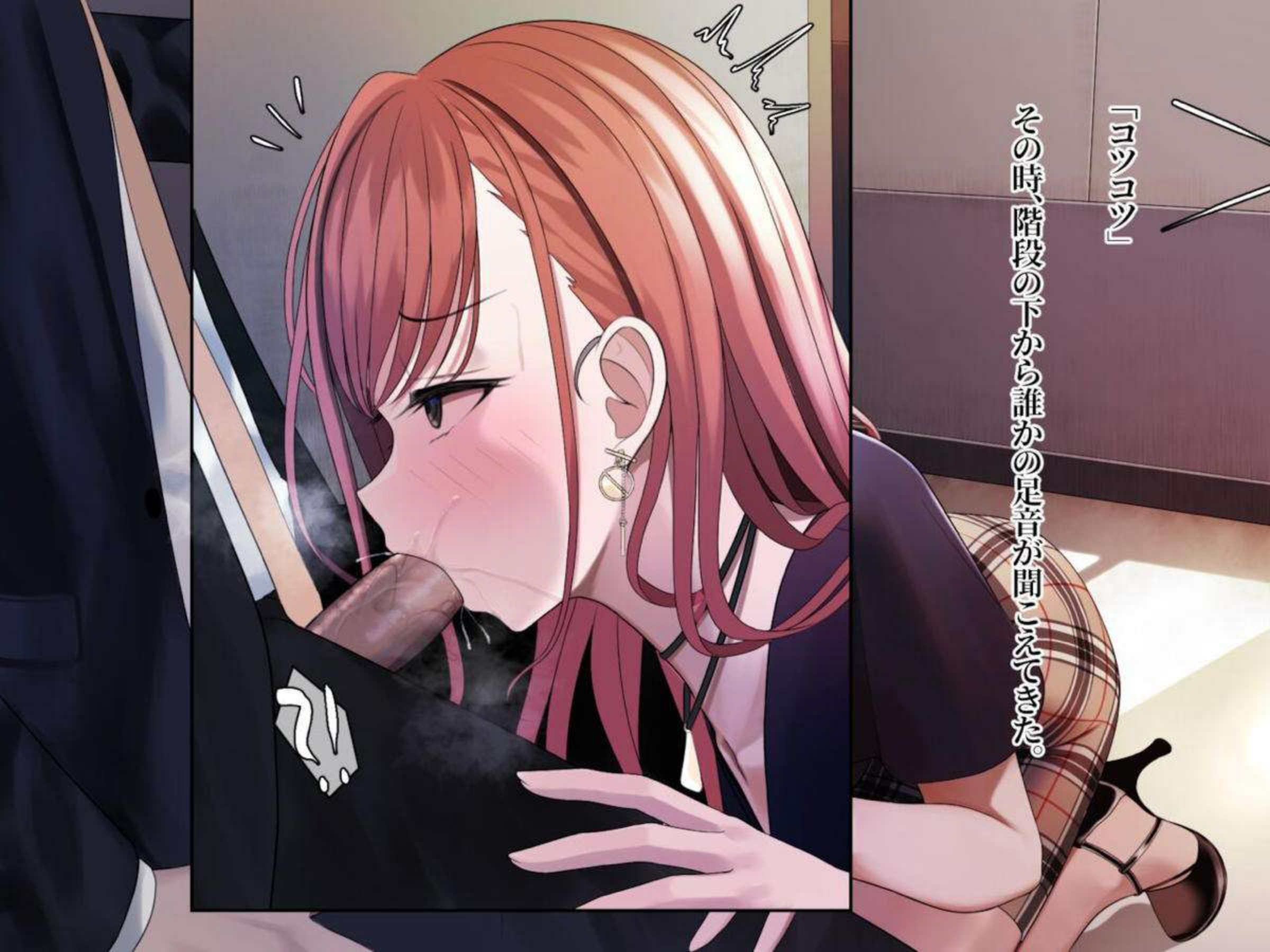


夏葉のような大切に育ってきたお嬢さんが、  
自分でチンコを咥えている姿はもちろん絶景だ。

けれども、その姿を見れば見るほど  
俺の心の中ではむしる強い欲望が渦巻いた。

でも、ちやうど許されたばかりなのに、ここで勝手にしたら...





「コツコツ」

その時、階段の下から誰かの足音が聞こえてきた。

その音は、なんとか踏みとどまっていた  
俺の理性をむごたらしく吹き飛ばしてしまった。

「ごめん、夏葉！」

俺は夏葉の頭をつかんで欲望に従うままに振り始めた。

ピクッ

ギモン

ん、うわー！

ドキッ



丹念に手入れしてきた夏葉の顔は

たちまち唾液とあらゆる体液、

そして化粧品が入り乱れて

ぐちゃぐちゃになった。

それでも夏葉は思ったより抵抗せず、

俺の手の向くままに頭を

動かしてくれていた。

それだ、どこからか酸っぱくて  
いやらしい臭いまでする。

ほっほっ  
ほっほっ



「口に出すよ。」

んっよっ!!

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

んっ



喉奥に大量の精液を流し込んで俺はやっと正気に戻った。  
夏葉が飲み込もうとしても逆流してこぼれ落ちる精液が、  
夏葉の顔と階段、そして俺のスポンを汚していた。

んんん



ドロドロ



夏葉は真っ赤になった顔で涙ぐんで俺を睨んでいた。

ああ、やっぱり怒ってるか。





「おはようございますー！」

そんな俺を助けてくれたのは智代子の声だった。

俺たちは口論する暇もなく、

慌てて顔と周りを綺麗にして事務所に戻った。

「げっぷ」

夏葉の口からなかなか聞けない下品な声が出た。

「あれ夏葉ちゃん、何か食べた？」

「い、いや……」

「お顔色が悪いようですが……どこか悪いところでも……？」

「違……」



夏葉、そして有栖川家とのトラブルを避けるという  
当初の計画は無様にも俺が彼女の口を  
めちやくちやに犯したことで破綻してしまった。

俺の意志は俺が思っているよりもずっと弱かったのだ。

急いで綺麗にしたにもかかわらず、

夏葉が座っているソファにはねばねばした  
液体がたくさん流れ落ちていた。

もしかして怒っているように見えたが彼女も  
楽しんだのではないか？

こうなってしまうならついでにさっさと……。

俺は自分を合理化しようとする自らの欲望に  
引かれてさらに深い泥沼に落ちていった。

階段での事件から数週間が過ぎた。

その後も夏葉は何度か俺にセックスを求めたが、俺は疲れているとか、これは性癖なんだと言い訳をして、ただフェラをさせていた。

セックスさえしなければ有栖川家と何とか許してもらえるのではないか、という山勘を願ったのだった。

いや、もちろん許してくれるはずがないことを俺は知っていた。

むしろ自分の娘が信じて任せた男のチンコを口にしてるなんて大事だ。

だからといって、どうしても夏葉との関係を断ち切るわけにもいかなかった。

俺が拒否する素振りを見せるたびに、

夏葉はまたあの時のような寂しい顔をして、

らしくない涙声で話したからだ。

夏葉はいつの間にか俺に依存、または

執着のような反応を見せはじめていた。

しかし問題は俺にもあった。

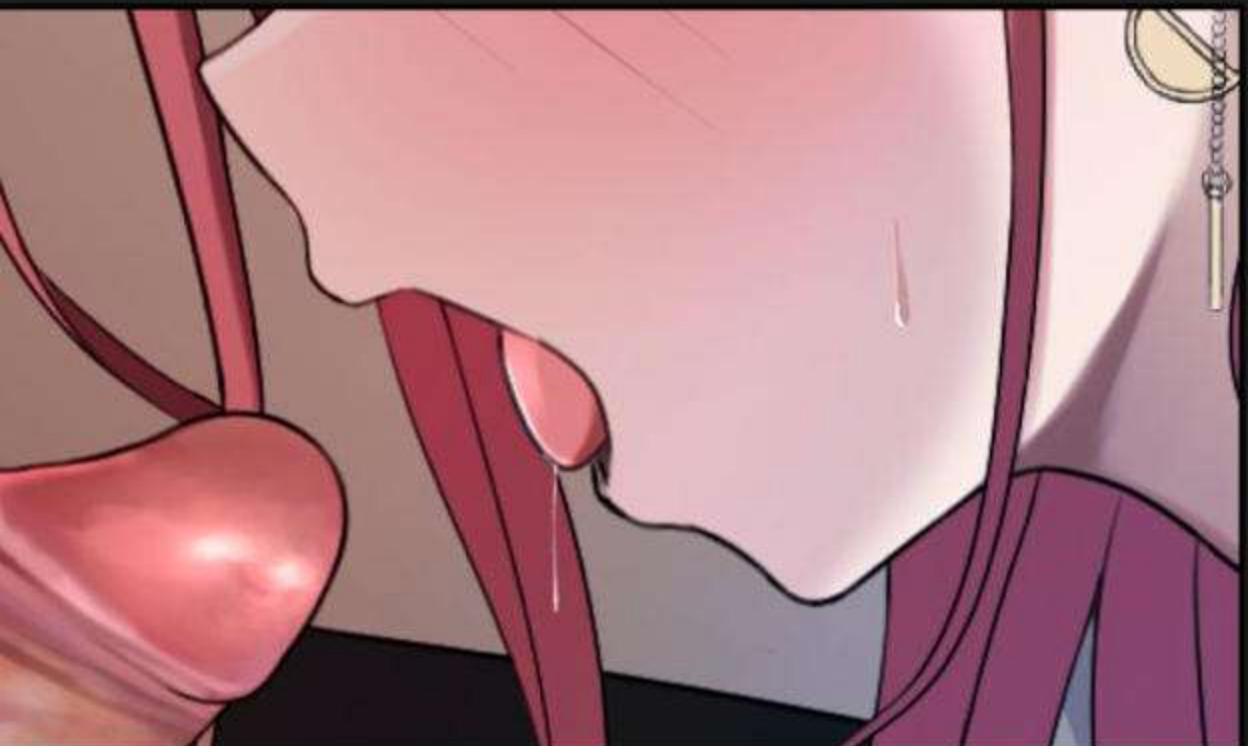
夏葉は最初、口でチンコを唾えるることさえ嫌がっていたが、  
今ではイラマをさせる俺の手を受け入れるどころか、  
自分で喉の奥深くまで飲み込もうとしたりもした。

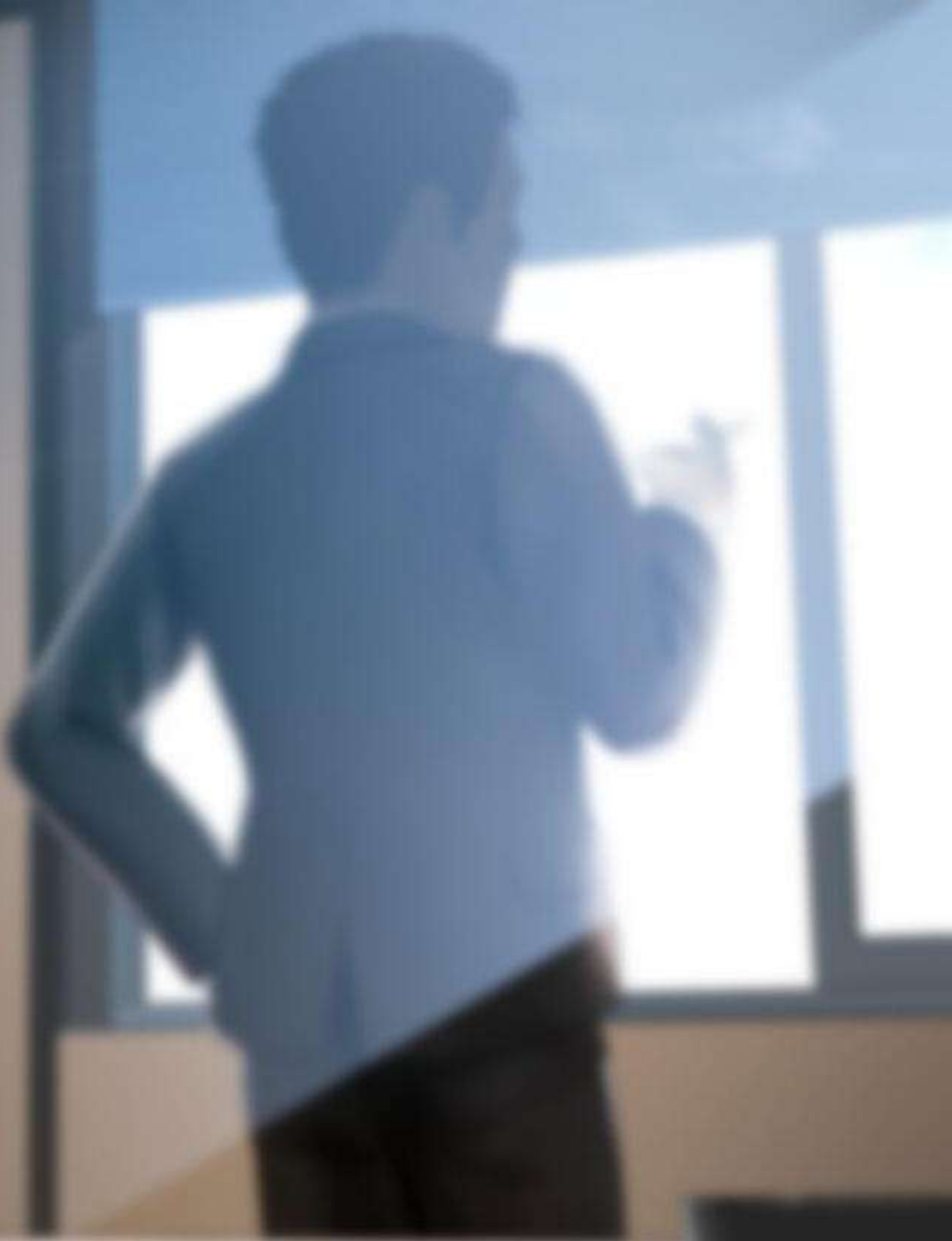
それを見て、俺は夏葉を俺の暗い欲望で染めるのに  
少しずつハマっていったのだった。

未だに有栖川家が俺たちの関係に気づかなかったことは不思議だったが、同時に少しの安堵感もあった。考えてみれば漫画やドラマの金持ちの家でもないし、娘のプライベシーをそれほど隅から隅まで知っているはずがない。

ぎりぎりだがこのままうまく行けば大きな問題は起きないかもしれぬ。

俺は油断してしまったのだ。





ある日の午後、天井社長が俺を社長室に呼んだ。

「失礼します。」

電気が消えた社長室に入るやいなやタバコの煙が鼻をつく。

社長は俺に見向きもせず、開いた窓から外を眺めるだけだった。

俺はいつもと違う雰囲気から直感的に大きな問題が起きていることに気づいた。





「お前、担当アイドルのことをどう思っている？」

「はい？」

「知らないふりをしてしても無駄だ。二通りは知っていたのだから」

社長の言葉はいつにも増して重かった。

「昨日の夜、突然有栖川家から電話があったな。」

「今までの283プロへの投資金を全部回収したいと。」

「投資金……？」

有栖川という名前が社長の口から出た瞬間、胸が潰れる思いだった。だがそれよりも、投資金というのは初耳だった。

「経営のことはお前たちが気にしないようにと伝えていなかったが、283プロダクションは有栖川グループのある人から投資名目で個人的な金額をもらっていたんだ。」

「今までそのお金がなかったら危ない時期もあった。事務所の規模に合わない大きな仕事もしばしば取れた。アイドルたちに小さな事務所がよく経験する、険しい仕事もさせずにすんだ。」

「社長、それは一体…」

「黙っていたのはすまないが、今回の件も私一人で解決するためにも理由を聞いたんだ。」

「先方は理由は何も言わず、お前の安否を尋ねてきたぞ。」

「…!」

「賢いお前なら何を言っているのか分かるだろう。出て行け…。」

俺は逃げるようにして社長室を飛び出した。

もしかして有栖川家は全て知っていたのか？

しかも有栖川家が事務所に経済的にも影響力を行使していたなんて…

多くの疑問が頭の中をかすめる。  
しかし、二つ確かなことがあった。

有栖川家は、いや、正確に言えば夏葉の両親と  
家族は、俺が夏葉との関係を整理することを  
望んでいるということだ。

資金源を武器に脅迫されたことに腹は  
立つことが、同時に事務所のみんなに迷惑を  
かけてしまったという事実<sup>に</sup>罪悪感が押し寄せてきた。

今朝会った夏葉に、別に変な様子は見えなかった。

むしろ朝からフェラを自らしてくれたいことを考えると、  
夏葉は何も知らないに違いない。

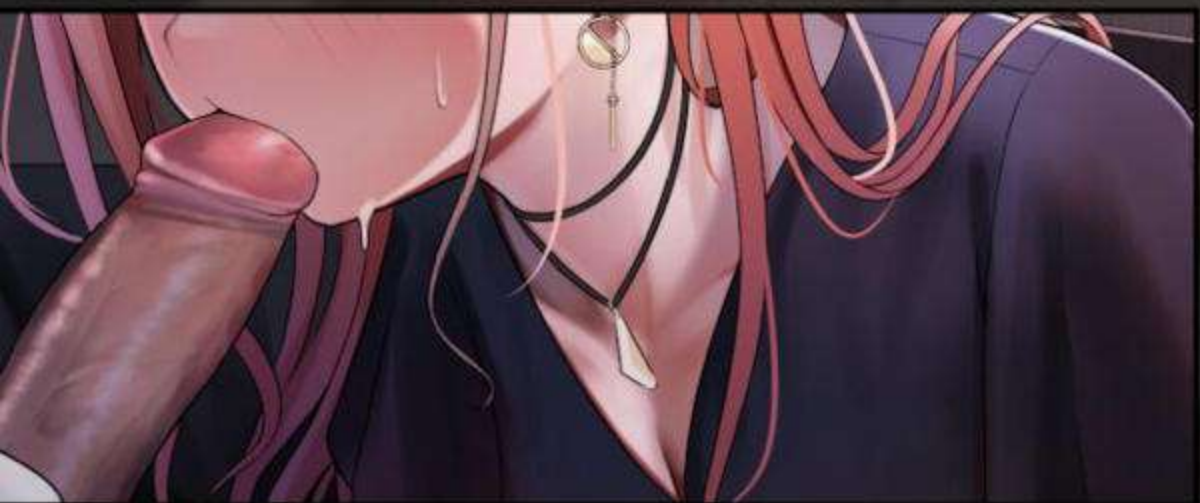
夏葉に何の指示も、話もしなかったということとは、  
有栖川家は283プロでアイドルを続けること  
自体は許しているのか？

夏葉のアイドル活動に特段の制裁をしないなら、  
俺が夏葉との関係さえ整理すれば  
また支援してもらえるかもしれない…。

頭が痛い。

…

「あの、プロデューサー？」



「夏葉か。」

「何をそんなに考え込んでいるかしら？」

俺の机の前には、いつのまにか夏葉が立っていた。

「ねえプロデューサー、今晚どう？」

普段なら夏葉と二人きりになるのは  
熟慮しているが今は好都合だった。

夏葉との関係を整理できるかもしれない。

俺は、夏葉の妙な眼つきに違和感を覚えながらも、約束をした。

『くろく』

「ズンッ」

「ズンッ」

俺は下半身の激しい痛みで目が覚めた。

俺は…夏葉とバーに行つて…カクテルを飲んで…

それ以来、何の覚えもない。

俺はぼんやりした精神をやっと捕らえた。

「あら、やっと正気に返ったわね、プロデューサー」

目が覚めた途端に見える光景は絶望的だった。

俺の隣で酒を飲んでいた夏葉は、  
いつものまにか俺の上に戻り、  
騎乗位で挿入し終えたところだった。





夏葉はまるで雌獅子のような眼差しで、  
俺を狩ろうとしていた。この前の悪夢が蘇るようだ。

しかももっと危険なことはここがホテルなんかではないことだ。

記憶が正しければ、ここは夏葉のマンションだ。



「夏葉…」

まだ酔いが覚めていないせいかな、

金縛りにあったように、声は口の中をぐるぐる回るばかりだった。

そんな状態でも夏葉は自分のマンコに俺のモノを入れていた。





あははは

は

ざ

は

今日の昼に夏葉との関係を整理しろという事実上の最後の通告を受けてたのに、こんなセックスを  
してしまうなんて、後のことがあまりにも恐ろしくなる。

それにここは人里離れたホテルでもない、夏葉の家だ。  
愛する娘にあげた家で露骨に情事を行うとはなおさらだ。

あゝ

んん



ズグ

もちろんこれは俺の意志じゃないが夏葉の親には関係ないだろう。  
いずれにせよ有栖川家に真っ向から  
反抗してしまったことに変わりはない。

プロデューサー、私もう♡

俺の気持ちなどお構いなしに、  
夏葉はピストンを加速していく。

ん♡あ

ん♡あ

ズ  
ッ

パ  
ン  
ッ

ズ  
ッ

パ  
ン  
ッ





一瞬意識が暗転し、精液が夏葉の中に押し寄せていく。

夏葉は震えながらも、射精を終えたチンコを挿れたまま、腰を動かし続けていた。

俺は一番危険な時に、一番危険な場所で夏葉に申出しをしてしまったのだ。



もう終わりか…。



これから起こる災難を予感した俺の体は、  
だんだんと冷たくなっていく。

「プロデューサー、やっぱりこういうのは嫌でしょ？」

夏葉は先程とは違ってもの静かな声で話しかけてきた。

「ロケ地に行った時、プロデューサーのモノは  
ものすごく大きかったのに…

あの時の大きさも、あの時の興奮もこんな  
セックスでは満たされないのね。」

この女は何を言ってるんだろう…







「私、今まで一度も一人で慰めたことがないのよ。  
バカな事だと思ってた。」

でもね、プロデューサーとロケ地に行った

あの夜以降、その時を思い出して毎晩してしまふのよ。

あんなことしてにハマってはいけないと思って、

今日こそは元の私に戻ろうって…

頑張ったけどやっぱりこんなセックスでは満足できないわ。  
プロデューサーごめんなさい、好きにして。」

酒に酔った声で夏葉がポツリポツリと告白をしてくる。

明日、俺はどうなるんだろう。

有栖川家に何かされるのだろうか。

だがそんな生存の危機に匹敵する不安からか、  
いつにも増して巨大な性欲が心に湧き上がっていた。

「好きにして、だど？」



酒のせいか、性欲のせいか、

ぼやけた視線の先には夏葉の愛犬カトレアの寝床が見えた。

その近くにはカトレアの首輪が置かれている。



「キヤー!!!」

俺はカトレアの首輪を掴むと、

夏葉の上気した体をベッドの下へ突き落とした。

普通はこんなことをしたら

セックス中でさえ説教されるはずだ。

しかし夏葉はカトレアの首輪を

握る俺の手を見て、黙って床にひざまずいた。

「はあ…はあ…」

「今からお前は…人間じゃない。」

細く綺麗な首には合わない  
大きな首輪をしっかりと絞めていく。

彼女は上気した顔で黙って俺を見た。






すでに起こったことにこれ以上悩んでも仕方がない。  
俺は悩むのをやめて目の前のことに集中した。

ここにいるのは有栖川家の令嬢でも、  
俺の担当アイドルでもない。

ただ、これから起こることへの期待と恐怖で  
震えているメスが1匹いるだけだ。

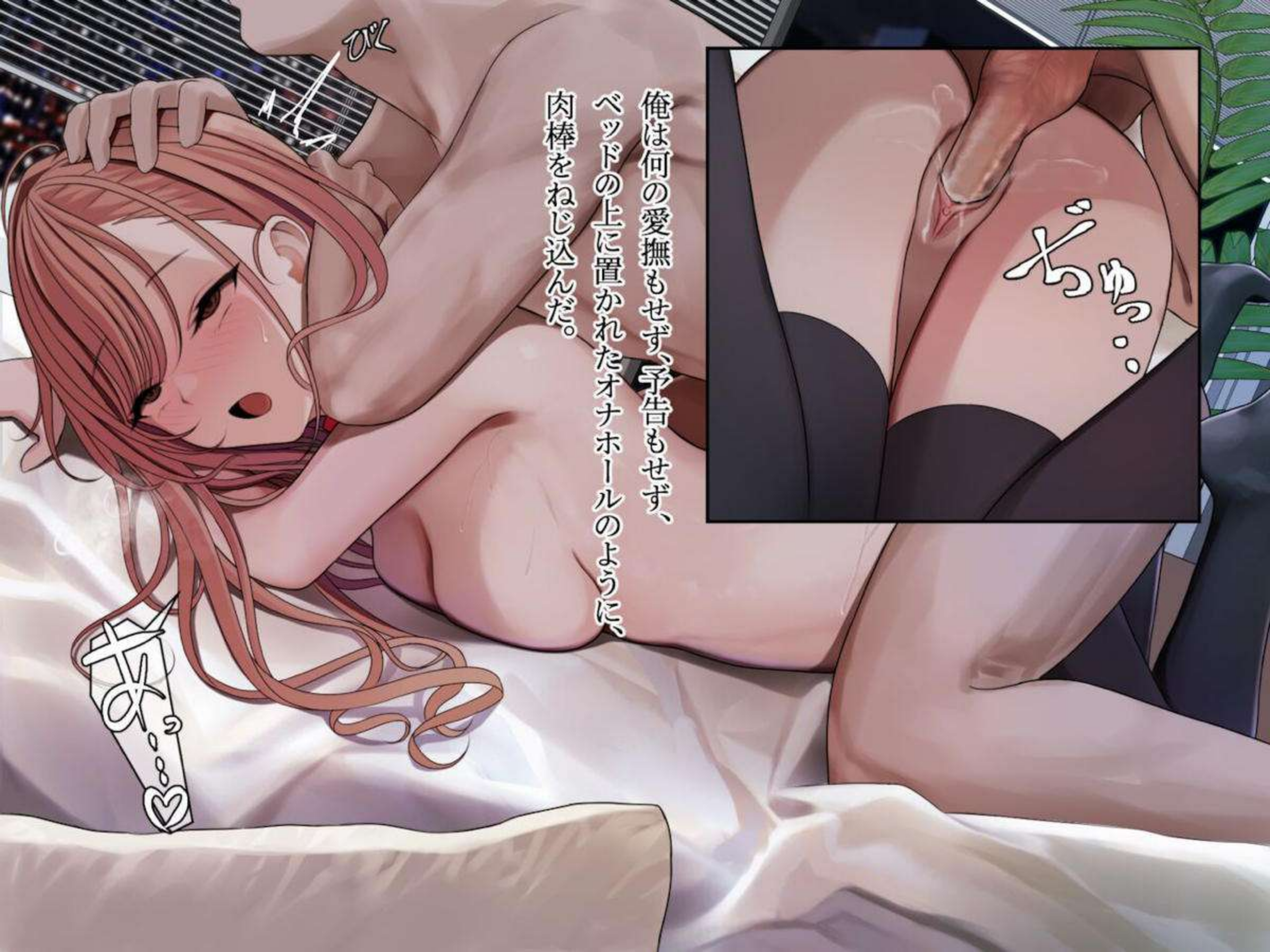


夏葉は大人しく俺の下敷きになってじっと見つめてくる。

あれほど嫌っていた体位、

それも首を押さえつけて息をするしかない姿勢なのに。





俺は何の愛撫もせず、予告もせず、  
ベッドの上に置かれたオナホルルのように、  
肉棒をねじ込んだ。

ちゅっ...

ひく

おはよう  
♡



ガッ

ガッ

!! 200% 100% 100%



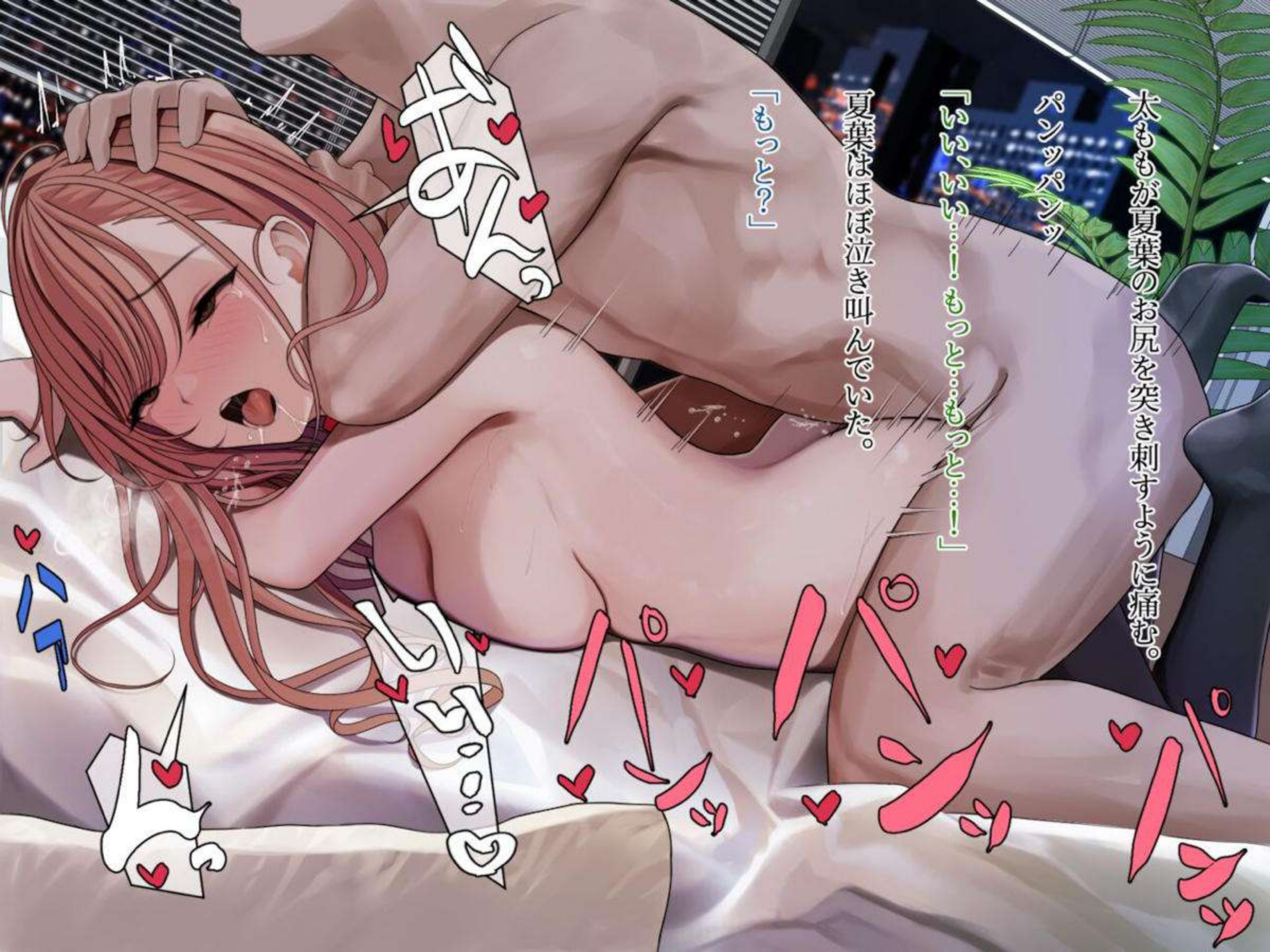
太ももが夏葉のお尻を突き刺すように痛む。

パンツパンツ

「ふふふふ……！もっど……もっど……！」

夏葉はほほ泣き叫んでいた。

「あ……」



俺は夏葉の首に巻いたカトレアの首輪を引つ張った。

昔から一度は夏葉にやってみたかった。

ズン

ズン





引っ張るたびに夏葉の目は白眼を剥く。

足の指はびくびくし、口からは聞いたことない音が出てくる。

ズッパ

んんん

んんん



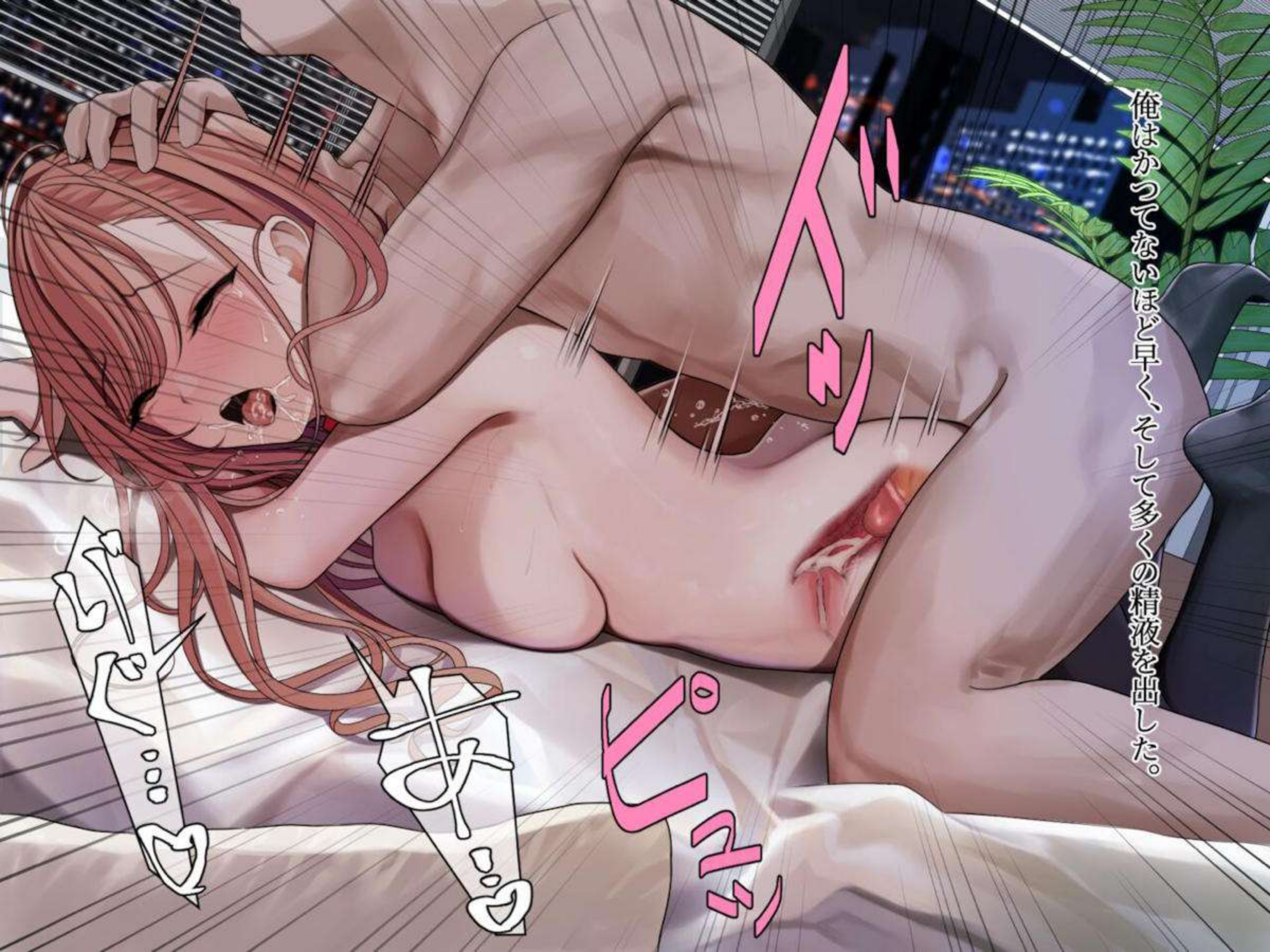
俺はかつてないほど早く、そして多くの精液を出した。

クッ  
クッ  
クッ

クッ  
クッ  
クッ

クッ  
クッ  
クッ

クッ  
クッ  
クッ





はあああ...あ...

射精が終わるや否や、罪悪感と恐怖がつのる。

わずか数週間前の夏葉が今の

自分の姿を見たら何を言っただろう。

彼女は射精が終わった後もしばらく身震いしていた。





我に返った夏葉は何も言わずに俺に寄りかかり、そのまま夜を明かした。

夏葉に父親が事務所を脅している、

と言いたかったが、どうしても口に出すことができなかった。

俺の身の上はさておき、迷惑をかけたと思った夏葉が、

283プロダクションを出るかも知れない気がしたのだ。

俺は静かに次の日の俺の運命を待った。



そして翌日、俺は283プロを解雇された。



興奮がしずまると、俺はベッドに

沈んで身震いする夏葉を見て、恐怖に襲われた。

俺は何をしないでかしたんだ？

俺は夏葉を放り出して、マンションを飛び出した。

自分がしでかしたことに自分でも驚いていた。

俺は少しの切っ掛けで、急な下り坂を滑り降りるようだと俺自身ではどうともならないほど、あっという間に彼女を蹂躪してしまおうようだ。

しかし、そんな背徳感と逸脱感にむしる俺をさらに興奮させた。

俺は救いようのない破廉恥な人間だったのだ…

俺の頭の中は、

有栖川家に報復されるのではないかと  
不安、夏葉に対する罪悪感、そうして性的興奮が  
入り乱れていた。

そして、そのふらつきはすぐに自分の体を蝕み、  
俺を眠りへと誘っていった。

周期的に襲ってくる寒気と痛みで目覚めるのを  
何度も繰り返した俺は、翌朝になってやっとスマホの  
通知に気がついた。

週末だったので幸いだっただか。

俺はベッドで横になったままメッセージを確認した。  
そこにはみんなからの心配や慰めばかりだった。

「…また事務所には何も言っていないのだろ…」

俺はメッセージをスクロールしていくうちだ。

アイドルの名前の間から天井社長の名前を見つけた。

「どういうことかは分かるだろう。」

しばらく休め。アイドルたちには私から連絡する。」

「事務所にはなるべく来るな。」

「もし事務所置いてあるもので必要なものがあつたらはづきを送らせる。」

まさかと思ったが結局このようになったとは。

それは事実上の解雇予告だった。

俺はぼんやりとベッドに座っているしかなかった。

予想していたことだったが、朦朧とした頭の中が一瞬熱くなってくる。

俺は足の間で頭をうずめて、か細い悲鳴を上げた。

その夜は便座の前に座り、しきりに嘔吐した。

そして数週間が過ぎた。

ほとんど寝るだけだった俺の家は、

たちまち引きこもりの部屋のようになっていた。

はづきさんが差し入れてくれたインスタント食品は  
底をつき、溜まっていくのはただ古い洗濯物だけだった。

最後に家の外に出てから何日経ったのかも  
思い出せない。

俺は来る日も夏葉の首を絞めてセックスをした  
記憶を思い出し、ティッシュに精液を注いだ。

暗いトイレの便器にティッシュを捨てる。

鏡の前で見た俺の姿はほとんど廃人になっていた。

昼夜逆転した生活の唯一の楽しみは283プロのアイドルたちが活動する姿を確認することだけだった。

彼女たちは一応は俺があらかじめ組んでおいたスケジュールに従って活動しているようだった。

事務所のアイドルたちが俺の家の住所を知らないのは本当に幸いだと思った。

こんな場所に来られると本当に困る。

ピンポン

そんな思いをしていた矢先、玄関のベルが鳴った。  
はづきさんかな？

「…」

玄関のドアを開けると、夏葉がスーツケースと一緒に立っていた。

今日一日中窓を開けなかったので気づかなかったが、外は雨が降り注いでいた。

夏葉は雨に濡れた子犬のような姿だった。

もちろん、俺の体たらくよりも凄惨ではないが…。

俺たちは久しぶりに会ったお互いを黙って眺めていた。



「どうしてここは分かったんだ？  
帰って…」

「大丈夫よ、プロデューサー。何が起こったのか  
全部聞いたわ。プロデューサーは悪くない。ごめんなさい。」

「…」

「家は誰も知らないうちに出てきたわ。  
カトレアも信頼できる人に預けたし。  
もう行くところはプロデューサーの家しかない。  
必要なものはすべて持って来たから心配しないで。」

「そして、これ…。」

夏葉はいつか見たことのある首輪を取り出した。

「もう一回…やって。」

夏葉をもう帰せないことに気がついた。

それより俺は久しぶりにきちんと勃起していた。

どうせ俺はすべてを失ったんだ。

急な下り坂は下りていくほど滑りやすくなる。

むしろ何も怖いものがなかった。

こうして俺と夏葉の不安な同棲が始まった。

不器用だったが、夏葉は掃除も料理も家事だってやってくれた。

まるで夫婦になったような気がしたのか、

夏葉は嬉しそうな表情を見せた。

そんな顔を見て、俺の欲望はますます燃え上がった。

朝起きて、昼ごはんを食べて、それから寝る前にも

何度も俺は夏葉と肉欲を分かち合った。

それを数週間。俺たちは体も心も壊れた。

俺と夏葉はもはや普通のセックスでは

満足できなくなった。

そしてその夜…

「プロデューサー。これはちょっと…」

「何週間も出られなかったから、夜でも

出掛けたいと言ったのは夏葉じゃないか。早く歩こう。」

ストレスと疲労で俺はすっかり狂っていた。



夏葉の裸身は、所々せい肉がついていた。

過去の健康な体型をつくるのには  
何年もかかっただろうが、それが崩れるのは  
わずか数週間もかからなかったのだ。



だがその姿はむしろ「女性」ではなく  
「雌」の姿そのものだった。

まるで雌犬が連れ出されるかのように、彼女は赤い  
首輪に引かれて危なっかしい足取りで歩き始めた。

「ビッ！」

時々、車と通行人が遠くを通り過ぎる。

ライトが見えるたびに、

彼女は痙攣しているように驚いた。



影の中を歩きながら道行く人と車を避け、  
十数分も迷った結果、俺たちはとうとう町を  
一周してしまった。

最初から人気のない住宅街だったためか、  
幸運にも一度も見つからず、俺の住んでいる  
マンションの近くまで来ることに成功した。

夏葉の体は冷や汗と愛液でまみれていた。

「何だ、まさかこんな状況でイッたのか？」

「…」

マスクに遮られ、夏葉の言うことはよく聞かえなかった。

俺は満足できなかつた。

プロデューサー業から追い出されたことへの  
憂さはらしてもするかのようぞう

俺は果てしない渴望を夏葉とぶち撒け始めた。





路地に入った俺は、夏葉の手をはなした。

「さあ、夏葉。ピースしてみてください」

「うう…」

ドキ

ドキ

ドキ

ドロッ

夏葉はこの変態的な状況に完全に適応したのか、  
何の不满もなく従順に俺の命令に従った。

夏葉の足の間から白い粘液が下品に落ちる。

「何でもするって言ったよな？  
これでイクんだ。」

「……」

ドキ

ドキ

ドキ

俺はバッグの中からディルドを取り出し、  
彼女の前に投げた。

マスクの上に見える夏葉の細く震える目が  
巨大な棒を見つめる。



地面に立ったアイドルが夏葉の体の動きに合わせての出たり入ったりを繰り返す。

担当アイドルにこんなことさせるなんて。

俺は背徳感と不安でまたもや勃起した。



ズー

ズー

娘との性関係がばれて首になったプロデューサーと、それに反発して家出した娘がこのようなとんでもないことをしていることを知っていたら、どんなことが起きるだろうか。

おそらく夏葉の両親は今ごろにはもう娘が家出していることを知っているだろう。

はよ

はよ

しかし、俺たちには何も起こらなかった。

数日前、夏葉は両親に自分が海外に行ったと嘘をついた。

情報力の強い有栖川家がそんな嘘を信じるなんて不思議なことだった。

グッ

「はぁはぁ…」

夏葉の苦しそうな息づかいがだんだん速くなっていく。

こんな状況でも感じられるなんて…



その瞬間、轟音を立てて何か近づいてくる。

自動車だった。

車は路地に入り、素早く角を曲がって  
俺たちの横を走り去った。

ビュッ

ビュッ

ガッ  
クッ  
クッ



突然現れ耳が裂けるように近付いてきて、  
消えた後にも耳鳴りがするようだった。

俺たちは見られただろうか。

スピードは速かったし見られなかったかもしれない。  
もし見られたなら警察に届けられるのか。  
有栖川家にばれるのか？

幾多の思いが頭を掠める。

オオオオオオオオ



だがそんな中でも夏葉は、  
まるで歩くように無意識の動作でピストン  
運動を続けていた。

突然の招かざる客のトキメキが、  
統制できない性欲と混ざって揺れた。







コッ

どこかから足音が聞こえた。

俺と夏葉は驚いてすぐ家に向かって走った。



帰宅した俺は、抗しがたいほどの虚しさを感じた。

マスク越しに表情を見ることはできなかつたが、

彼女はいつにも増して、旅館より、事務所の階段より、彼女のマンションよりも興奮していた。

彼女はだれよりもまっすぐだったが、今ではこれ以上肉体的な興奮に抵抗できないほど落ち込んでいた。

他ならぬ俺の作品だった。

何度も絶頂する彼女を見た俺は、

心の中の何かが冷たくなってくるのを感じた。

俺は感情を振り払おうと携帯電話をつけて  
メッセージを確認する。

数多くの未読のメッセージがぎっしりと  
画面を埋め尽くす。

そこにはこの前と同じように  
社長からのメッセージもあった。

「大変なことがある。」

「風野灯織の事だ。」

「すまない、私が現場になかなか出られずな…。」

社長はいつにも増して沈鬱な声だった。

トイレに座ったまま、プロデューサーの電話は数十分間続いた。

夏葉は薄いドアを1つ挟んで電話を盗み聞きした。

全部聞くことはできなかったが、

事務所に大きな問題が生じたことだけはわかった。

「はい、わかりました。じゃ…。」

プロデューサーは電話を切るや否やしきりに

嘔吐し、泣きじゃくり始めた。

そしてすぐ眠気と疲れから便座の上で倒れてしまった。

驚いた夏葉は彼を部屋に連れていきベッドに寝かせた。

プロデューサーが落ち着いたことを

確認した夏葉は、服を着てマンションの外に出た。

久しぶりに着るちゃんとした服だった。

冷ややかな夜風を感じながら携帯電話を取り出す。

「はい、お嬢様。」

電話の向こうから中低音の声が聞こえる。

「おそらく大体のことはご存じだと思いますが、

283プロダクションに問題が生じているようです。」

彼はあたかも状況を見抜いているかのように説明を続けた。

それは要約すると、数日前、風野灯織が  
一日警察署長として活動中、ある警察官に  
セクハラを受けたというものだった。

何とかその場は免れたものの、

その警官は政界ともからんでいたため、  
社長に連絡を取り「VIP」に風野灯織を  
「紹介」させたいと話してきたという。

それは言わば枕営業の強要だった。

「このような状況になるとは…。」

ですがお嬢様のせいではございません。  
あまり落ち込まないでください。  
それでは失礼します。」

夏葉は電話を切ったが、立ちくらみでその場で座り込んでしまった。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

旅館で半分レイプに近いセックスをされた時、ものすごく腹が立った。

しかし翌日、両親に恐怖を感じるプロデューサーを見て、彼女の心の中で何かがうごめいた。

それはチャンスだった。

「2883プロダクション」の数多くのアイドルを出し抜いてプロデューサーを独占できるチャンス。



最初は彼女の両親は彼女とプロデューサーとの関係を知らなかった。

もし知っていたとしてもこれといった反対はしなかっただろう。

しかし彼女には有栖川家がまるで漫画のように娘の一挙手一投足を監視して庶民との交際に反対するという事実が「必要」だった。

欲しいものがあれば、最善の努力で勝ち取ってしまうのが有栖川夏葉だ。

283プロダクションは彼女がその中でも

「最も望むもの」を得るのには良い環境ではなかった。

そこで彼女はちよつとした「ごまかし」で

プロデューサーを引き抜いて独占することに成功した。

もちろん、解雇されてしまったプロデューサーに  
罪悪感を感じたのは事実だ。

しかし、彼が望む性行為を通じて彼を慰めることが  
できると考えた。

それは…誤算だった。



そのうえ、他のアイドルにまで酷い経験をさせるとは想像もできなかったことだった。

いつか凍世からこんな話を聞いたことがあった。

会食で自分が偉い人にお酒を注ぐのを、プロデューサーが止めてくれたと。

いなかったら、お酒を注ぐだけで終わらなかつたかもしれない。

逆にプロデューサーが現場にいたら、今回のことも避けられたかもしれない。

だからこそ今回のことは全て自分のせいだと思わざるを得なかつた。

夏葉は座り込んでしばらく悩み、

再び携帯電話を手に取って通話ボタンを押した。

番号は、天井社長のだった。



そして、数日後…

彼女が訪ねたのは見慣れない部屋だった。



彼女は確かに天井社長に連絡して、

灯織の代わりに「VIP」本人に会わせてもらった。

有栖川家のコネで何とか、

それが駄目なら腕力で解決できると思った。

しかし、訪ねて行った高級ホテル中では彼女は

ただ年老いた金持ちたちのおもちゃに過ぎなかった。

乾いたグラスの飲み物を飲み、彼女は気を失って倒れた。

そして下の方から感じられる異物感と痛みで目覚めた。

「何…してる…」

「やっと目が覚めたんだな。」

彼女は薬の勢いで身動きできないまま、  
かろうじて頭を上げて体の下を見た。



「あ…?!」

彼女の大きく開いた陰部からは  
熱いどろどろの液体が漏れる。

そして、肛門には、知らない中年のチンコが  
出たり入ったりしていた。

「ダメ、そこはプロデューサーにもまだ…!」







お、おめ...

「んっっ…?!」

「何だ、散々楽しんでるくせにうるさいな！」

んっっ  
んっっ

胸をわしづかみされ、  
反射的にうめき声が聞こえた。

彼女のか細い抵抗は、  
馬鹿にされてしまう。

んっっ  
んっっ



「次は俺だ。」

「Yes!」

次のチンコが夏葉の前に現れる。





おっぱい!!!

お尻

おっぱい

夏葉の悲鳴も顔負けに、彼女の股は  
びっしり濡れて、チンコを吸い込んでいた。

め...め...め...!!

め...め...め...



しゅっくわん

白濁液があふれ出る。

「あゝきもちいいな、

やっぱ若い子のまんこは  
締めが違うんだよなな」

射精を終えた彼は、舌のつまった  
発音でつぶやく。

男の姿は、まるで酒に酔った、いや酒ではなく、  
何かに酔ったような様子だった。

しゅっくわん

しゅっくわん

「元々283の黒髪の子が来ることになっていたんじゃないか？」

「まあいい。今日いい「物」をしたからなんでもいいんだ！」

男はふらつきながら部屋を出て行った。

ドアが開くと、数人のうめき声が聞こえてくる。

そして外にいた一人の男が、まるで切符売り場の列を待っていたかのように中に入ってきた。

あーん

夏葉は昏迷した精神をやっとの思いでとらえようとしたが、  
思い通りにはいかなかった。

彼女にできることは知らない男たちが自分を  
犯すのを見守ることだけだった。

「ふう、随分待ったな」

穴場を埋めに入ってきた男の人は、  
どこかで聞いた、聞き慣れた声だった。



「えっ…?!」

声の正体に気づいた夏葉はびっくりして  
彼の顔を見つめた。

「お前は…どこか…私の妻に似ているな。」



あ……!!

声も出ないうちに、男の肉棒は精液が溜まった  
夏葉の膣内に素早く入り込んだ。

「いや妻じゃなくて…。  
むしろ私の娘に似ているな。」



「お父さん、お父さん……！」

「そう……そうだ……いいぞ！」

「お父さん」という叫びに彼の動きはますます激しくなっていく。

夏葉は否定したかった。

今私を犯している人が私の知っているその人ではないと。

けれども顔をあげて眺めた彼の姿は、ぼんやりと腰だけを本能で揺らしていたが、たしかに二十年来見てきた顔で間違いなかった。

その時、  
急に胸に違和感を覚えた。

「…どうして？」

ぎゅっと握られた胸の乳首からは、  
出てはいけな液体が流れ出ていた。



夏葉は漏れ出るうめき声をこらえるために舌をかんだ。  
絶対犯されてはならない人に犯されているという  
背徳感と、その状況でも自分が感じているという  
罪悪感、そして胸から流れ出る液体に対する驚愕が  
入り混じって彼女の精神を徐々に蝕んでいった。

「んっ。」

「おお、これは薬の効果なのか。」





昏迷した精神が限界を超えようとした瞬間、  
鋭い痛みが彼女の頭を強打した。

突然痛みが走り去り、倦怠な恍惚感が  
その向こうを襲ってきた。

夏葉はついに、心の中の何か壊れるような感じがした。



「さあ、列が詰まってるんだ。口も使え。」

「フッ」

ブキ

ブキ





「何だ、急に積極的になったな」

はま  
♡

ん  
♡

ん  
♡



「おい、俺にもやっでくれよ」

ちゅぽ

ちゅぽ

夏葉の姿を見た群れがますます彼女の周りに押し寄せた。

そして、ついに彼女二人では手に負えないほどの男たちが彼女を犯し始めた。

彼らは酔ってまるでゾンビのような姿だった。



彼らもこの部屋の外では大人しく立派な人の  
ふりをしていたはずだ。

夏葉のように、誰よりも真面目に頑張って  
そこまで上り詰めたはずだ。

しかし、性欲という動物的な本能の前では、  
彼らの崩壊を防ぐことはできなかつた。





そして何十ものピストン運動の末、多量の白濁液が  
彼女の全身の隅々まで流れ始めた。

とろとろ  
とろとろ  
とろとろ  
♡

びり

びり

♡

わずか数週間前に彼女が見たならば、  
実に恐ろしい光景だったに違いない。

いや、彼女が考えるにもぞっとした。

だがそうだからこそ、ますます興奮感を  
隠すことができなかった。

彼女の口は思わず微笑んでいた。

ちゅ  
ちゅ

ちゅ  
ちゅ









夏葉のすべての穴は、プロデューサーではない  
男たちの体液で満たされていた。

でも彼女はもう気にしないことになった。

夏葉は

悟ってしまったのだ。



A character with red hair and a red headpiece is being held by multiple hands. The character is wearing a red top and black fishnet stockings. The background is a soft, reddish-pink color.

最初はプロデューサーが変な性欲なだけで  
仕方がないと思った。

だがプロデューサーに首輪を初めて巻かれたとき、  
そして全裸で散歩に出かけたとき、彼女は自覚してしまった。

自らがこれを望むということ。

しかしそれまでもこれはプロデューサーをただ、  
愛しているからだとばかり思っていた。

違う。

有栖川夏葉はマゾヒストなのだ。

その現実を理解した夏葉はもう悩まないこととした。

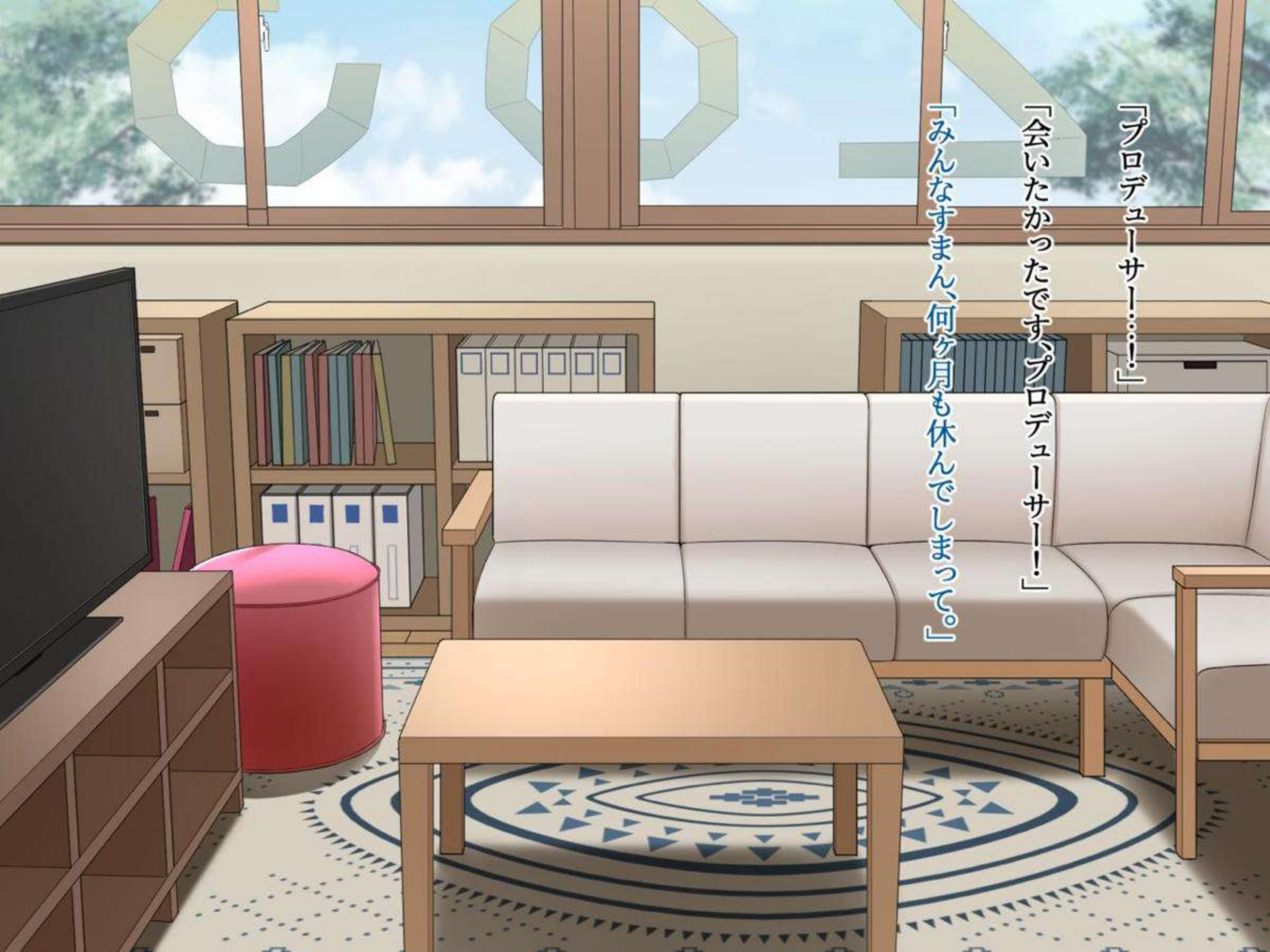


そして数週間が経った。

「プロデューサー……！」

「会いたかったです、プロデューサー！」

「みんなすまん、何ヶ月も休んでしまっで。」



天井社長から解雇通知を受けてから数ヶ月ぶりに俺はまた復職することになった。

出勤するという事実が、久しぶりに着飾ったスーツがぎこちなかった。

突然解雇が取り消されたという話にはとても驚いた。

社長は不合理な解雇通知を送ったことで俺にしきりに謝罪した。

もちろんどうしようもない状況だったし、俺も同じような状況だったら似たようなことをするしかなかっただろう。

ところが一部始終を聞くと、社長の話では、突然有栖川家から連絡が来て俺を許してくれると言ったというのだ。

夏葉の家出が役に立ったのか？

更に不思議なのは、何日か前に会った夏葉の親の反応が、何か変だったということだ。

夏葉の両親は、まるで夏葉の家出どころか、俺たちが交際しているという事を初めて聞いたように振舞っていたのである。

俺が空気読めなかったのか？

今までのことはなかったことにしようという無言の暗示なのだろうか。俺の知らない上流階級だけの世渡りだったのだろうか。

それにしても彼らの反応はあまりにも本物のようだった。



ああ、もちろん夏葉のご両親に俺が会った理由は…。



「プロデューサー！」

俺を呼ぶ声に頭を上げると、そこにはいつものように、夏葉が立っていた。

少しやつれたが、彼女は元の活動的な姿に戻った。



灯織の件で連絡を受けた日、俺は酷いうつ病にかかった。

夏葉が帰ってこないの、俺は彼女が俺を捨てたとばかり思っていた。

しばらくして彼女が戻ってくると、灯織の件は誤解がだったと社長からの電話があった。

さらに驚くべきことに、彼女はもう一人身ではないということだ。

いやあんなに中に出したから驚くべきことじゃあないか…  
その日以来夏葉の外出が少し増えたことは気がかりだが。

「あと数ヶ月しかちゃんど活動できないけど、  
よろしくプロデューサー。」

俺は夏葉の手をぎゅつと握った。

まだ事務所の誰も俺たちの関係を知らない。  
もちろんいつかは明らかにすべき時が来るだろう。

俺は夏葉に感謝している。

大変な状況でも支えてくれて、理解してくれたことに対して。

たとえそれが夏葉本人の欲望がきっかけだとしても。



FIN